

# 交野ヶ原の民話をたずねて③ 「夜泣き石」 源氏の滝の物語

交野の里に源氏姫という美しい姫が、梅千代という可愛らしい少年と住んでいた。源氏姫と梅千代とは姉弟でも何でもなかつたが、ある日、源氏姫が外出した時かれと逢つて知り合いとなり、梅千代が姫の家に遊びに来て、たがいに身の上話をしたところ、二人とも幼いころに母と生き別れしており解った。そして、急速に親密な仲となり今は親身の姉弟の様に一緒に暮らしてゐるのであつた。

そのころ大和と河内の国境に「おろち山」という山があり、そこに一団の賊が住んでいた。その賊は、時折り山を降りては近郷近在の家々を襲い掠奪をほしいままにしていた。

ある年の暮れ、この山賊の一団はまたもや山を降りて掠奪を始め、ついに交野の里にも現れ、源氏姫の邸を襲つて、姫と梅千代とを縛りあげて山寨(山賊の居住するところ)へ引き揚げた。ちょうどその時、山寨では四〇になるかならぬの眉目美しい女の頭(かしら)が手下ともどもと酒宴を開いていたが、掠奪を

で、早速その二人を連れて参るよう命じた。手下は別室から姫と少年を連れきたが、攫われた際のあまりの驚きからか、少年は最早息絶えていた。女の頭は、じつとその少年の死骸に眼を注いでいたが、急に顔色を変えた。そして、手下どもに別室に下がるように命じ、彼らが別室に去ると急いで姫の縄を解き、少年の死体を抱き上げてはらはらと涙を流した。

この不思議な様子に姫は訝しく思つたが、可愛い梅千代の死体を見るともうたまらなくなり、「弟の敵、思い知れ」と訝しきながら叫んだ。姫は仇の口から意外な言葉を聞いて愕然と色を失つた。

そこで、その手下が、交野の里から源氏姫と梅千代を攫つてきた話を繰り返すと、女の頭は妙に氣を惹かれた模様で、早速その二人を連れて参るよう命じた。手下は別室から姫と少年を連れきたが、やはり自分の頭は、じつとその少年の死骸に眼を注いでいたが、急に顔色を変えた。そして、手下どもに別室に下がるように命じ、彼らが別室に去ると急いで姫の縄を解き、少年の死体を抱き上げてはらはらと涙を流した。

この不思議な様子に姫は訝しく思つたが、可愛い梅千代の死体を見るともうたまらなくなり、「弟の敵、思い知れ」と訝しきながら叫んだ。姫は仇の口から意外な言葉を聞いて愕然と色を失つた。

本文参考『交野市史民俗編』



## 日本全国の商店街の中から「はばたく商店街30選」のひとつに選ばれたモノ

京阪交野線の宮之阪駅を降りたら、そこは宮之阪中央商店街だモノ。約150店舗だモノ。少し歩くと、電柱には「みやのさか夕市」「パワフルショアード」の看板があつて、商店街の取り組みがさかんに行われていることがわかるモノ。天野川すぐそばの宮之阪中央商店街は、長年、七タイイベントに力を入れてこられ、7月になると商店街には色とりどりの短冊が飾られ、七夕市が賑わうモノ。秋には渚商店会と連携したハロウィンイベン

トも開催されるモノ。

宮之阪中央商店街ならではの取り組みは、ボランティア講座を受けた商店街サポーターが取り組む

「ちょいサポ」事業だモノ。自分のスキルを誰かに教える、地域のためにボランティアがしたいと希望する方々が登録用した「子どもいきいき笑顔食堂」「地域いきいき笑顔力フェ

ード」「各種サークルや教室の開催」の取り組みなどで活躍できるモノ。サポートの方への謝礼には商店街で使える「宮サポチケット」が発行されるので、さらに地域に還元することができる仕組みだモノ。

地域の方々やサポーターの方々が中心となつて、ちょっとした困りごとやニーズに応じて柔軟に取り組みながら新しい交流が生まれるので、さらに地域に還元することができひ来てモノ。



## かりが灯る商店街だモノ

JR星田駅のロータリーを出て正面が星田駅前商店街だモノ。43店舗が加盟しているモノ。商店街の目玉イベントは去年で7回目を迎えた「秋フェス」。商店街各所で、500円商店街企画や、輪投げ・ハロウィンネイル・フェイスペイント・からあげ・フライドポテト詰め放題などの模擬店が出るモノ。トップワールドの駐車場ではステージショウが行われ、とても賑わうモノ。地震や大雨、台風が多かつた去年は、初となる防災体験企画が行われ、テント・水消火器・AEDが体験できるブースを設置し、女性消防団員が講師・スタッフとして活躍されたモノ。商店会組織内には星田市内の商店会の中で唯一「女子部会」を設置し、企画に女性の視点を取り入れながら運営を進められているモノ。

星田駅前商店街を歩いていて目を引くのは、各店舗の前に設置された、交野市のゆるキャラ「おりひめちゃん」のイラストと店名が入った「あんどん」だモノ。夜になると、あんどんがやさしい昔ながらのあんどんの光が灯つて商店街を彩るんだモノ。七夕の時期になると、商店街は笹と短冊で飾られるモノ。各お店では誰でも短冊を書けるようになつていて、お願事を書いた短冊は、「織女石(たなばたせき)」をご神体としてお祀りしている星田妙見宮にてお焚き上げして天に届けてもらえるそうだモノ。

新しいことに挑戦し、賑わいを創り出している星田駅前商店街にぜひ足を運んでみてモノ。

と叫びざま躍りかかり、短刀で女の頭の胸を刺した。けれども、女の頭はこれに抵抗するでもなく、姫の手を掴みながら「源氏姫、梅千代、許しておくれ」は私と弟の産みの母であろうとは。しかし自分が美しい姫と少年を攫つて、苦痛に歪む頬に泪を滂沱と流しながら叫んだ。姫は仇の口から意外な言葉を聞いて愕然と色を失つた。

先は真暗になった。姫は母と弟の死骸にすがり付いてひた泣きに泣いたのであり物語るところでは、女は正しく二人の実母で、まだ女頭の若い頃、ある家に嫁いで一人の姫をもうけたが、ある事情で姫を残して別れ、それから再び他家へ嫁いだ。しかし、ここでも一人の男児を産むとまた離別の憂き目を見た。

それから十八年の月日を送つたが、やはり自分の腹を痛めた二人の子供のことが気にかかり、山賊をしているとはいえ、一度は逢いたいものだと念じていた。今日偶然にも二人の子供と一緒に外な対面をしたが、それも束の間、母子相互に殺し殺されるして悲し

い最期を遂げるのだ、とのことであつた。姉弟のように暮らしてきた私と種違ひの弟であり、弟を殺した山賊の頭は私と弟の産みの母であろうとは。しかもその母を自分の手にかけてしまつたとは何とした悲しいことか。姫の眼

は私と弟の死骸に追つたという。そして、姫はそこを飛び出すと付近の滝壺に身を投げて母や弟の後を追つた。先は真暗になつた。姫は母と弟の死骸に